

校番	12	学校名	広島県立福山葦陽高等学校	校長氏名	小林泰崇	全・ <input checked="" type="checkbox"/> 定・通	<input checked="" type="checkbox"/> 本・分
----	----	-----	--------------	------	------	--	---

1 ミッション（地域社会における自校の使命）

備後の伝統校として地域から愛され、新しい時代をたくましく生き社会に貢献する人材を育成する。

2 ビジョン（使命の追求を通じて実現しようとする自校の将来像）

【目指す生徒像】 変化の激しい社会をたくましく生きるための社会人基礎力を身に付けた生徒

【自校の将来像】 一人ひとりの生徒を、教育活動相互の関わりと生徒相互の関わりの中で育てる学校

「強く」：自ら考え行動することで、人生を切り拓いていくことができる確かな学力と体力を育成する～「前に踏み出す力」

「正しく」：自ら律し他者と協働することで、地域や社会に貢献していくことができる態度を育成する～「考え抜く力」

「美しく」：グローバル化する社会の中で、多様な人々とつながることができる姿勢を育成する～「チームで働く力」

3 環境分析

○入学者選抜生徒数の推移

年度	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
志願者数	41	39	27

○本校を受検することにつながった要因（％）

	中学の先生	保護者	先輩	友達	オープンスクール	福山地区進路相談会	その他
H28 入学生	46	3	3	14	9	3	22
H29 入学生	18	15	6	9	9	11	32
H30 入学生	36	18	1	15	13	1	15

①平成 28、29 年度と概ね定員を充足していた選抜志願生徒数が、平成 30 年度は 0.68 倍と大きく減少した。この原因としては、中学校訪問時に周知してきた本校の厳しい指導の在り方や他校定時制課程のアピールの充実等が考えられる。これまで創り上げてきた指導のスタイルを踏襲しつつ、本校定時制課程のプラス面を更にアピールすることで、高校生活に前向きな生徒の志願者数の増加につなげていかななくてはならない。

②本校を受検することにつながった要因として、中学校の先生や保護者の薦めが増えている。これは、これまでの本校定時制課程の丁寧な指導や面倒見の良さが評価されているためだと考えられる。また、平成 29 年度は定時制のオープンスクールを実施した。本校の指導に対する更なる理解を図っていくことが求められる。

③三修制では、全日制と同じ期間で高校を卒業できることが生徒のモチベーションとなっている。また、四修制では、午前中の時間帯でゆっくりと基礎学力を身に付け、学業と就労の両立を図ることができる。このことを積極的に発信する。

○進路状況の推移（％）

進路状況	平成 27 年度		平成 28 年度		平成 29 年度	
	三修制	四修制	三修制	四修制	三修制	四修制
進学	100	23	80	46	100	14
就職	0	77	20	46	0	86
一時的な就労等	0	0	0	8	0	0
未定	0	0	0	0	0	0

○三修制選択者の学年に占める割合（％）

平成 28 年	平成 29 年	平成 30 年
14	14	26

④三修制を選択する生徒の割合が増えている。このことは、将来的に進学を視野に入れている生徒が増えていると考えられる。そうした生徒のニーズを反映させた指導が求められる。

⑤ここ数年、卒業時には全員の進路が決定している。生徒の進路実現に向けた取組を継続していく。

⑥生徒指導を徹底することで、マナーが身につくなど健全な人間性が育成され、就職につながっているのではないかと考えられる。

○中途退学者数の推移

中途退学者数	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度
1 年	12	16	8
2 年	7	8	1
3 年	4	4	0
4 年	0	0	1
合計	23	28	10

○就労率（％）

就労率	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度
1 年	62	77.5	70.7
2 年	67	78.9	84.0
3 年	74	68.4	94.1
4 年	100	84.5	62.0
合計	76	77.3	77.7

⑦退学者数は減少傾向にあるが、退学者は一年次に偏っており、一年次の指導に課題がある。

⑧就労率は、徐々に増加している。学校と仕事との両立が図られている生徒も多いが、うまく両立できずにいる生徒、就労支援を要する生徒も少なくない。生徒個々の実態に応じた計画的・継続的な指導や支援が必要である。

平成 30 年度学校経営目標

4 目標の設定

学校経営目標						
達成目標	評価指標	実績値	目標値			担当部等
		平成 29 年度	平成 30 年度	平成 31 年度	平成 32 年度	
1 考え抜く力の育成						
1) 基礎学力の定着を図る中で、学んだ知識を活用しながら主体的に問題を解決していく力	定期考査における基礎力定着問題の通過率（国・数・英）	新規	50%	55%	60%	教務部
	定期考査における活用問題の通過率（国・数・英）	新規	40%	45%	50%	教務部
2) 学んだことを自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、粘り強く学び続ける力	自己の将来を見据えた検定試験受検者数（新たな級や新たな資格にチャレンジする生徒の数）	70 人	30 人	35 人	40 人	教務部 進路指導部
	卒業年次の進路実現率	100%	100%	100%	100%	進路指導部
2 前に踏み出す力の育成						
3) 周りの人との関わり合いを通して、社会性を身に着け、自らの進路を切り開いていくことができる力	自ら進んで毎日挨拶をすることができる生徒の割合	新規	80%	85%	90%	生徒指導部
	月間遅刻者数が 1 以下の生徒の割合（年間 11 以下）	20%	25%	30%	35%	生徒指導部
	前年度の問題行動の発生件数と比較した減少率	新規	5%	7%	10%	生徒指導部
3 チームで働く力の育成						
4) 「体験的な学び」を通して、社会的な視野を広げるとともに、他者と協働して課題に取り組んでいくことができる力	学校行事に対する満足度（+生徒の具体的な変容）	86%	90%	92%	95%	保健美化部
	「体験的な学び」を通して、社会的な視野が広がった生徒の割合	86%	90%	92%	95%	教務部 生徒指導部
	各種ボランティア活動等への参加率（校外清掃への参加を含む）	70%	80%	82%	85%	保健美化部 進路指導部
4 働き方改革						
5) 業務改善の取組を進め、職員の在校時間を縮減する。	職員の勤務時間外の平均（月）	36 時間	33 時間	30 時間	25 時間	校務運営会議
	業務改善の取組について、学校全体で取り組んでいる（肯定的評価）	58.3%	65%	70%	75%	校務運営会議

※正答または準正答であった場合、その設問を「通過」とし、通過した児童・生徒の割合をその集団についての通過率としている

5 行動計画

学校経営目標			
達成目標	本年度行動計画	中期行動計画	担当部等
1 考え抜く力の育成			
1) 基礎学力の定着を図る中で、学んだ知識を活用しながら主体的に問題を解決していく力	授業のユニバーサルデザイン化により、学習習慣の育成と基礎・基本の定着を目指すと同時に、個々の生徒の進路ニーズに合わせた教材作りを行う。	教職員は、学び直しと基礎・基本の定着を目的とした効果的な学習環境を整え、就職・進学に対応した学力を身に付けさせる。	教務部
	基礎・基本の定着を図る反復学習を定期的に行うとともに、知識を活用する力の育成を目指した授業づくりを進める。	教職員は、生徒が主体的に課題発見・解決のために知識を活用し他者と協働して学ぶ姿勢が身に付く授業を実践する。	教務部
2) 学んだことを自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、粘り強く学び続ける力	各検定の情報提供と指導により受検への意欲を高める。希望者への個別指導及び不合格者への事後指導を教員間（教科担当及び担任等）で連携して行う。	授業で身に付けた力を活かし、就職・進学への動機付けを明確にするため各種検定に挑戦させる。	教務部 進路指導部
	葦陽定時学びのスタイルの早期実現を目指し、学習と就労の両面から支援を工夫していく。低年次から担任・保護者・JST・公共職業安定所・就労支援機関等との連携を深めていく。また、面接指導を通して生徒の実態把握に努める。	面接、進路 LHR、夏季進路指導、インターンシップ、成果発表、就労・合格体験発表などを計画する中で課題発見や計画力の醸成を促し進路実現に繋げる。	進路指導部
3) 周りの人との関わり合いを通して、社会性を身に付け、自らの進路を切り開いていくことができる力	教職員がカウンセリングマインドをもち、生徒に自発性・自律性・自主性が醸成されるように指導する。	生徒が悩みや不安を相談できる体制づくりを進める。	生徒指導部
	学校の設備（靴箱・駐輪場）の正しい使い方や、校内でのマナー等、基本的なモラルや社会性を身に付けさせる。	規範意識を向上させ、自分を律する能力を身に付けさせる。	生徒指導部
	学校のルールを周知し、問題行動を未然に防止する。また、問題行動があった場合には、どこが問題だったのかを理解させ、再発がないように丁寧に指導する。	望ましい集団づくりのなかで、自己存在感を与える。	生徒指導部
3 チームで働く力の育成			
4) 「体験的な学び」を通して、社会的な視野を広げるとともに、他者と協働して課題に取り組んでいくことができる力	PTA とも協力しながら生徒主体の生徒会行事を実施し、多くの生徒が行事に参加する中で、自己と他者を尊重する態度を育成する。行事後に生徒の感想を募り、生徒の変容をみるとともに、次の行事に反映する。	学校行事、生徒会行事、LHR に主体的に取り組む中で、お互いに協力し合う集団を育成できている。	保健美化部
	外部講師による講演や地域の文化施設を学びの場とする体験的な学習を通して社会的な視野を広げ、地域の課題を協力して解決する態度を育てる。	地域の企業や学校における専門家と連携を図り、自己の役割を自覚させ、社会貢献の態度を育てる。	教務部 生徒指導部
	身の回りの整理整頓・毎月の清掃活動・校外清掃を通して、自己有用感や美化活動・ボランティア活動への関心、意欲を高める。	全校生徒が主体的にボランティア活動に参加し、社会とのつながりを自覚し、他者と協働することができている。	保健美化部 進路指導部
4 働き方改革			
5) 業務改善の取組を進め、職員の在籍時間を縮減する。	・ 定時退校日の確実な実施を行う。 ・ 勤務時間管理システムを稼働させることで、勤務実態を把握し長時間勤務の改善につなげる。	教職員の勤務時間に対する意識改革を進め、長時間勤務の改善を行う。	校務運営会議
	・ 校務運営会議後の連絡会を機能化させ情報の共有化を図る。	横のつながりを強め、協働的に課題に取り組むことで、業務改善を推進する。	校務運営会議